

特別寄稿

A Special Contribution

シェイクスピア能と融合文化

Noh Adaptation of Shakespeare and Fusion of Cultures

岡本 靖正

前東京学芸大学学長

OKAMOTO Yasumasa

Former President of Tokyo University of Arts and Sciences

Abstract

This is the record of a special lecture delivered at the Annual Convention of ISHCC in March, 2004 in Tokyo. The speaker, Professor Yasumasa Okamoto, former President of Tokyo University of Arts and Sciences, tells as an introduction of his co-experience with Kuniyoshi Munakata (Ueda) in *Hamlet* which was presented as a students' production in 1958. Then he argues whether any non-fusion cultural experience is possible today in Japan. He goes on to discuss the unique fusion of Noh and *Hamlet* which was realized in 1980s when Munakata thought of "To be or not to be: is no longer the question", and analyzes the text of the abridged version of *Noh Hamlet*. Okamoto's final comments revealed his expectation that Japanese professional Noh actors be able to perform *Noh Hamlet* in Japanese as a part of their repertoire.

本日は、国際融合文化学会にお招きいただきまして有難うございます。また、ただいまはご丁寧なご紹介をいただき、恐縮いたしました。

上田邦義先生からお話があったとき、長い行政職からようやく自由の身となった直後で、まだ慌ただしくしており、書齋とともに頭も混乱を極めておりまして、全く何の用意もありませんでしたので、お引き受けしたものがどうか迷いました。結局あえてお引き受けしたのは、一つには、この学会の顧問にたぶん発足時から名を列ねていながら、文字通り名ばかりであることに後ろめたさを感じていたこと、もう一つには、先ほどご紹介がありましたように、上田さんと私は大学時代の同級生で、この話はおそらく長い行政職から解放された私にアカデミック・リハビリテーションの機会を与えて下さろうという上田さんの友情だと理解したからでした。

私たちは、学部3年生の頃、数人で *Hamlet* の輪読会を始めました。だんだん参加者が増えて、そのうちに舞台上で上演しようということになり、"Act I of *Hamlet* in Full"と銘打って第一幕だけを上演しました。台本をカットすることを知らなかったのだと思いますが、それだけではお客さんを集めることができず、「前座」(?)として、吉田健一・西脇順三郎両先生に特別講演をお願いしました。いま思い返すと、ずいぶんと贅沢なことでした。ハムレットは最初からだれも文句なしに上田(宗片)さんに決まっていたように思います。私は裏方のつもりでしたが、役者が足らず、Marcellus をやりました。当事者が言うのですから割り引いてお聞き下さってよいのですが、とてもすばらしい出来であったと思います。当時学長であった朝永振一郎先生も観て下さいました。

公演後、英文科を主宰され、文学部長でもあった成田成壽先生が学部長室に私たちを呼んで下さり、朝永先生と西脇先生も来られて、朝永学長は、この名優たちを卒業させるのは惜しいから留年させようと冗談を言われ、西脇先生はウィスキーに陶然としておられて、詩は二つの相反するものの融合で原子爆弾に似ているのだと主張しておられました。実際には、名優は宗片(上田)ハムレット一人で、上田さんの能『ハムレット』に始まる能シェイクスピアは、いわばハムレット役に留年し、西脇詩論を实践して、東西の伝統演劇の詩的融合をはかってきたもの、と言ってもよいかと思えます。

(1)

上田さんからいただいた本日の題は、「シェイクスピア能と融合文化」です。最初に、

融合文化あるいは文化融合とは何か、それは可能なのか、どういう形で存在しうるのか、といったことについて考え、そのあと上田さんの"Abridged *Hamlet* in English"を材料にして、上田・能『ハムレット』の方法について私見を述べてみたいと思います。

日本は、独自の言語(やまとことば)を有する民族が形成されてからも、文字を持たず、公式の文書等は漢字・漢文を用いていたわけですが、やがて漢字の音を転用して万葉仮名を発明し、さらにはそのいくつかを簡略化した片仮名、平仮名を発明して、漢字・仮名混じり文が生まれ、いまに至っています。文字を駆使する歴史の初めから中国の文化に学んできたわけで、融合文化という意味では、上代における日本に固有の文化と中国の文化ほど、文化融合が行われたことはないのではないかと思います。その点では、同じ島国のイギリスでも幾分類似のことがあり、Norman Conquest (1066)以後、中世後期に北のゲルマン系の言語(古英語)と南のロマンス系の言語(ノルマン・フランス語[ノルマン人自身は北方系])の混交があって、1500年頃からシェイクスピアの時代の初期近代英語が形成されてくるわけです。

日本では、仮名文字が生まれてから1千年余りの間に、中国や朝鮮半島の文化に加えて、ポルトガルやオランダの文化、キリシタン文化との接触、幕末におけるアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシアとの接触を経て、明治維新以降のヨーロッパ文化の吸収の時代が始まり、その後いくつかの戦争を経験して国粹的・排外的時代をくぐり抜け、第二次大戦後はアメリカ文化の影響を受けて、すでに半世紀が経過しています。

私は、上田先生とともに、昭和30(1955)年に大学に入学して、英文学(英米文学)を勉強してきましたが、いま、自分の判断・思考・感性等のどこからどこまでが日本的なもので、どこからが外国文化に学んだものなのかと自問しても、正直のところわかりません。自分では比較的分析力はある方だと思っておりますが、この点については全く自信がない。和魂洋才という言葉がありますが、魂が本当に和であるか、これも自信がありません。それではコスモポリタンというか、一種の精神的無国籍者かと言えば、そうとも言えるし、そうやってしまっちはやはり違うという思いも残ります。「曖昧な私」と言うべきで、アイデンティティの曖昧さはぬぐい切れません。

このことは、文化融合は、私あるいは私たちの内部でその程度までに進行していることを意味しているとも言えます。現代日本の社会・文化全体の中で起こっていることでもあれば、個人の中で起こっていることでもある。外国語を勉強することは、その言語の異言語感、外国語としての抵抗感を無くする方向への努力であり、外国文学の勉強もまた同様

であろうと思います。しかし一方で、違和感・抵抗感は簡単に失ってはならず、それこそ理解の基礎になりうるものではないかという気がいたします。

話が飛躍するようですが、明治時代に外国の文化、特に欧米の文化を吸収しようとして以来、例えばイギリスについてであれば、「英学」として、文学といった特定の分野に特定せずに、地理、歴史、政治、経済、芸術等、生活・文化万般をひっくるめて捉えようとした時代がありました。私たちが大学に入った頃には「英学」という概念はまだ生きていました。いまも学会はありますが、その意義は小さくなり、概念自体が死にかけている、あるいはすでに死んでいる。もっともいまは地域研究（Area Studies）としてより確立された面もあります。しかし、それも含めて、研究がさまざまな分野・領域に細分化され、各分野・領域がさらにその中で細分化され、専門化してきました。それによって得たものはもちろん大きいのですが、その反面、失ったものも大きいのではないかと思います。

英文学を学んできた者、特に私のようにすでに老人世代の者は、このあたりで「新英学」とでもいうべきものを考える必要があるのではないかと考え、共同研究のプログラムをつくって科学研究費の申請をしようとしているうちに行政職を引き受けなければならなくなって、そのままになってしまいました。私が考えていた手がかりの一つは、文学なら文学、たとえば詩や小説を読んでいて、「わかりにくさ」あるいは「わからなさ」をできるだけ洗い出して、その基底に外国文化の異文化性、文化の国境がかかわっているのかいないのかを、機能的でありうる範囲で多様な領域の研究者が共同で検討することでした。それは外国文学・文化の研究者である私たちだからできるということがあるのではないかと、思っていたのです。「異文化理解」のためには、異文化としての抵抗感、理解の難しさを生んでいるものをその深部において捉える努力が必要で、その深部は芸術表現の微妙なところにあるのではないかと思います。

大学時代に上田先生と一緒に英文学を勉強して、私たちの入学と入れ違いに退官されたため教室で直接教わる機会はなかったのですが、私たちの共通の学問的師匠というべき人に福原麟太郎という先生がおられます。福原先生の師匠筋には、岡倉由三郎（天心の弟）、平田禿木、戸川秋骨といった方々がおられ、福原先生は日本の芸能に深く通じておられました。能についても随分沢山の文章を書いておられ、戦争中ですが、朝日新聞の劇評を担当しておられたこともあります。

『英文学研究法』に収められている論考の中で、先生はたえず「文学は国境を越えるか」という問題を考えておられます。先生は、トマス・グレイの研究（1933年にロンドンで

Henry Bergen と共編で出版された *An Elegy written in a Country Churchyard by Thomas Gray: Three Manuscripts* を含む)、シェイクスピア、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson)、チャールズ・ラム (Charles Lamb) 等の研究をされていますが、夏目漱石とともに、英文学をそのわからなさを自覚しつつ最も深く理解した日本人の一人でした。

融合文化、あるいは文化融合を考えたり実践したりするとき、自国の文化の深い理解に立って外国の文化に向かうと同時に、矛盾しうるこの二重意識を失わずにいることは大切な心がけであろうと思います。上田シェイクスピア能は、「融合」への試みではありますが、実際にはその努力を通じて、国境の越えがたさに向き合いながら、いかにしてそれを越えるかという二重意識の上に立っていると私は理解しています。

翻訳は、外国文化を自国の可能な限り広い範囲の人々の理解に供する重要な手段でした。それは、国境を越えようとする営為ですが、翻訳者は反逆者という言葉もあるように、言語に支えられた文化の国境の越えがたさを自覚させる営為でもあるのかもしれませんが。シェイクスピアの日本への移入の歴史はすでに十分な実績をもっていますが、舞台における受容は、いま、明治時代を思い起こさせる新たな翻案の時代というべき様相を呈していて、上田・能シェイクスピアはその先鞭をつけた早い実践として位置づけることができます。

(2)

次に、上田さんが歌と舞を基本とする能の様式を前提としてシェイクスピアを能化するに当たって解決しなければならなかったと思われる課題について考えてみたいと思います。ご本人を前にしてこういう話をするのはたいへん危険なのですが、少なくとも三つの課題があったのではないかと思うのです。三つは相互に関連していますが、あえて三つに分けて考えてみます。

一つは、極めて一般的な言い方をして、能は、ヨーロッパ的なドラマが終わったところから、あるいは終わったあとで始まると言えるように思いますが、その問題をどうするか。もう一つは、能は中世的な無常観を踏まえた一種の禅的な世界を前提にしているとすれば、その問題をどうするか。いま一つは、テキスト(詞章)の問題です。

あまり詳しく分析したり述べたりすると、たちまち馬脚が現れるので、『ハムレット』に限定し、ごく大雑把な範囲にとどめた話としておきたいのですが、まず第一の問題につ

いてです。上田さんはこれまで、(1)ハーバード大学エマソン・ホールにおける「仕舞・ハムレット第1独白」(1974)、(2)五番立てを模した「能ハムレット五場」(1982)、(3)「能ハムレット二場」(1984)、(4)「能ハムレット・ソロパフォーマンス」(1989)、(5)「英語能(短縮版)ハムレット」(2001)と5種のテキストを用意されて、それぞれに基づく上演を試みてこられました。

五番立ては、たいへん魅力的な構想でしたが、いかにも長く、『ハムレット』全体のできごとをなぞっている感がありました。「能ハムレット二場」は、さらに工夫が加えられ、ホレイシオを旅僧(ワキ)として登場させ、彼が死を前にしたハムレットから託された約束を守って、ハムレットの行為および起こったことの顛末を世の人々に語り伝えている。前場(第一場)は、"To be or not to be: that is the question"という思いに深くとらわれているハムレットが、イギリス行の途上から帰国し、オフィーリアの墓前での瞑想を経て、"To be or not to be: is no longer the question"という悟り、"The readiness is all"という心境に至る場として構成され、後場(第二場)は、事実上、原典の終幕に当たるレアティーズとの剣術試合の場です。正直に言って、私は、このヴァージョンにもひそかに不満をもっていました。まだ説明的すぎるのではないか、ホレイシオの言葉はどうも余計であり、後場は不要ではないか、と思ったのです。私の勝手な思いです。その意味で、まだ未完成かもしれませんが、「二場」ヴァージョンの後場をやめて、ずいぶん刈り込んだ短縮版が、最も能らしいのではないかと感じます。五番立てのときから、ハムレットの悟りにオフィーリアの死を深くかかわらせたこと、そしてオフィーリアの墓と小袖の使い方が卓抜だと思っておりました。短縮版ではそれが最も短く、しかし端的に機能していると思います。

次に、第二の課題ですが、原典で言えば、第三幕第一場の"To be or not to be: that is the question"から第五幕第二場の"There's a special providence in the fall of a sparrow....The readiness is all."へ至るハムレットの心境の変化、精神的成熟をいかに禅的な悟りとして表現するか。そのために上田・能ハムレットが原典に加えた最大の変更、変型・変奏が、"To be or not to be:~is *no longer* the question"であることは明らかです。それに妥当性はあるか。なお、「五場」版では"To be or not to be, is no longer the question"、「二場」版では"To be or not to be: is no longer the question"と、テキスト間にわずかな違いがあります。小さな問題のようですが、私は、リズム上可能であれば、"To be or not to be: that is no longer the question"というのが、英語としては落ち着きがあると思います。

Hamlet の能化を可能にしたのは、ハムレットの最も有名な独白の1行を大胆不敵に変型・変奏したこの1行である、と言ってもよいでしょう。この変型・変奏は、*King Lear* におけるコーディリアの死が、もともとは死なない形になっていた粉本のプロットの原型に加えたシェイクスピアの最大の変更であったのに匹敵します。上田シェイクスピアは、同様に原型の *Hamlet* に変更を加えたのです。それに妥当性はあるかということですが、私はあると思います。一つは、「能ハムレット」は、*Hamlet* のテキストを一旦解体し、コラージュとして再構築することを前提にしているからで、これは第三の課題です。ハムレットは、母の寝室でポローニウスを殺してしまった後、イングランドへ送られることとなりますが（第四幕第三場）、海上で海賊に襲われて帰国します。この間、第五幕第一場（墓堀の場）50行余りのところで登場するまで、500行近く（場面にして4場面）私たちの前に姿を見せません。海は何か変容（sea change）をもたらす力をもっているものですが、長い不在の後、ハムレットが再び姿を見せたとき、ハムレットに何か変化が起きているように感じる、と言えはたぶん言い過ぎでしょう。

墓堀（道化役）たちのとぼけた問答が彼の登場前に観客に対して提示していたこの場の調子に、気分的にずっと同調するハムレット、イングランドに送られたハムレット王子をめぐる世間の噂を道化の口を通して聞き、他人の目に映る自分の姿をいわば客観視するハムレット、掘り返される髑髏の生の生前を想像して、アレグザンダー大王の高貴な遺骸も土と化して酒樽の栓になる可能性に道化た気分で思いをめぐらし、その一つを手にして、それが幼い頃可愛がってくれた国王（父）の道化ヨリックの変わり果てた姿であることを知り、距離を置いて死に思いをひそめるハムレット。この場でただちにというのではないが、そこへ近づいてくる葬列によりオフィーリアの死を知って衝撃を受け、嘆き悲しむレアティーズとつかみ合を演じた後、レアティーズとの剣術の試合を申し込まれ、ホレイシオにやめるよう忠告されて、"There's a special providence in the fall of a sparrow. If it be now The readiness is all"と答えるとき、そこに至って観客には、それに先立つハムレットの長い不在と、墓堀の場でのハムレット像が全体として働き合って、その覚悟にハムレットの一種の悟達が唐突感なしに感得されるのではないのでしょうか。しかしそれだけではおそらく、能としては、その悟りが十分明確にはならない。そこで"To be or not to be: that is the question"からの解脱を明快に示す1行が必要であったのです。そしてその1行が上田さんの脳裏に浮かんだとき、*Hamlet* の能化が可能になったのだと思います。

三つ目の課題はテキストの問題です。「英語能（短縮版）ハムレット」が、*Hamlet* の

原テキストを解体した後、どのように再構築されているかを見るために、短縮版の英語テキストと日本語訳との間に、原テキストの出典箇所を並べて、パラレル・テキストをつくってみました。原テキストは、欄外に示したとおり、Stanley Wells and Gary Taylor, eds., *William Shakespeare: The Complete Works* (Oxford University Press, 1986)に拠っています。*Hamlet* 以外の典拠もあります。『江口』から1行 ("Omoeba kari no yado")、『敦盛』から2行 ("Life is a lying dream", "He only wakes who casts the world aside") で、これは作者のご教示によれば、アーサー・ウェイリー (Arthur Waley) の訳 (*The No Plays of Japan*, 1922) です。「能ハムレット」では2行の間に *Hamlet* からの3行が割って入っていますが、『敦盛』では合わせて「夢の世なれば驚きて、夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん」に当たるのでしょうか。

パラレル・テキストを比較するとわかるように、テキストはさまざま複雑にあちこちから切り取られ、継ぎはぎされて、再構築されています。この手法は、「パスティーシュ」 (pastiche) あるいは「コラージュ」 (collage) と言ってよいと思います。現代詩、代表的には T. S. エリオットが『荒地』 (*The Wast Land*, 1922) で使った詩法です。その点で言えば、そもそも日本の謡曲の詞章は、もともとさまざまな古典のテキストから歌や文言を自在に裁ち入れた綴織と言うべきもので、中世においてすでに現代詩の手法を先取りしていたと言ってもよいと思います。「能ハムレット」は、能のテキストの正統的な方法に則って、*Hamlet* のテキストを解体し、能化するドラマの局面を焦点化して、コラージュの手法で再構築したのです。

テキストについて、先ほど "To be or not to be: that is no lnger the question" について触れましたが、同様のことがあと2点あります。1点は "Thus conscience does make cowards of us all;/And lose the name of action" ですが、このままですと、構文上は、"does lose the name of action" と読むことになるでしょうが、英語として少し無理があるように思います。もう1点は "If it be now, it be now/ 'Tis not to come ..." ですが、リズムの上で可能ならば、"If it be now, if it be now ..." と "if" から繰り返す方が、英語としては自然ではないかと思います。

本当は、上田さんは、型付、曲付、囃子の使い方等、専門的な多くの難しい問題に取り組まなければならなかったはずですが、文学的な観点から言えば、少なくとも上の三つの課題は避けて通れない問題であったのではないのでしょうか。

最後に、私の勝手な望みを二つ言わせていただいて、話を終えたいと思います。一つは

「二場」版で、ホレイシオをワキの僧にしておられますが、諸国一見、一所不住の無名の旅の僧をワキとし、学者ホレイシオをアイとして設定することはできないか、ということです。そのワキの僧の前にハムレットをどのように登場させるかが、構想上の工夫のしどころになるかと思えます。

かねて私が抱いていたもう一つの望みは、一方で英語能を追求しつつ、もう一方で、専門能楽家による新作能の番組の一つとなるよう、日本語の詞章を完成させ、日本語による上演を考えていただきたいということです。お聞きしますと、今年12月にそれが実現するとのことで、早速私の望みの一つがかなうのをいまから楽しみにしております。

ご静聴有難うございました。

資 料

Abridged NOH HAMLET in English
by Kuniyoshi Munakata Ueda[The music to announce the entrance of the abate is played:
Hamlet enters. He is on his way home from exile.]

[SHIDAI Thematic song] (Soft-singing, rhythmic)

Hamlet: To be or not to be: that is the question: 3. 1. 58

To be or not to be: that is the question:

To die, to sleep, no more. 62

[SASHI-singing] (Soft, non-rhythmic)

Whether 'tis nobler in the mind to suffer 59-65

The slings and arrows of outrageous fortune:

Or to take arms against a sea of troubles,

And by opposing end them? To die, to sleep,

No more: and by a sleep to say we end

The heart-ache and the thousand natural shocks

That flesh is heir to,

[SAGE-UTA Low-pitched song] (Soft, rhythmic) 'tis a consummation 65-67

Devoutly to be wish'd.

[SAGE-UTA High-pitched song] (Soft, rhythmic) To die, to sleep?

Perchance to dream: ay, there's the rub:

Perchance to dream: ay there's the rub:

1

Stanley Wells and Gary Taylor, eds., *William Shakespeare:
The Complete Works* (Oxford University Press, 1986)

Act 3 Scene 1

Enter Prince Hamlet

HAMLET

To be, or not to be; that is the question:

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

The slings and arrows of outrageous fortune,

Or to take arms against a sea of troubles,

And, by opposing, end them. To die, to sleep—

No more, and by a sleep to say we end

The heartache and the thousand natural shocks

65 That flesh is heir to—'tis a consummation

Devoutly to be wished. To die, to sleep.

To sleep, perchance to dream. Ay, there's the rub,

英語能(短編能): ハムレット

(日本語訳)

上田邦義 作

[ハムレット、イングランドからの帰途]

[次第] (ヨワ時、拍合)

ハムレット: 生か死か、それが唯一の問題。

生か死か、それが唯一の問題。

死は、眠りにすぎない。

[サシ] (拍不合) いずれがより気高いのが、

不法な運命の矢弾を甘受するのと、

苦難の海に武器を取って立ち向かい

断ち切ってしまうのと。死は眠りにすぎない。

眠りによってすべてが終えられるなら —

心の悩みも、肉体が生来受けついでいる

数々の苦しみも —

[下歌] (拍合) それなら、死は、

頼むべき大団円。

[上歌] (拍合) たが、死は、眠りにすぎないか —

眠れば夢を見るのでは — それが問題ではないか。

眠れば夢をみる、それは問題だ。

2

For in that sleep of death what dreams may come. 3.1.68-70
 When we have shuffled off this mortal coil,
 Must give us pause: must give us pause.
 Thus conscience does make cowards of us all: 85
 And lose the name of action. 90
 Lose the name of action. —

[Hamlet notices the koan and approaches it.]

[KOTOBA SPEECH]

Hamlet: Soft you now! The fair Ophelia! 90-91

[Hamlet sits in front of Ophelia's grave, holds the koan in his arms, and sings.]

[WAKA song] (Soft, non-rhythmic)

Hamlet: I loved Ophelia: I loved Ophelia, Ophelia! 5.1.267

[Hamlet feels bitter regret and cries.]

[NORU-rhythmic singing] (Soft)

Forty thousand brothers could not, 267-269;267

With all their quantity of love,

Make up my sum: I loved Ophelia.

[Hamlet sits in front of the koan in a Zen sitting position and meditates. Shakuhachi solo of meditation music is heard.]

3

死という眠りの中でどんな夢を見るであろうか、
 肉体という束縛の糸を断ち切ってしまったとき —
 ここで立ち止まることになる。立ち止まることになる。
 こうして思索は人を臆病者にしてしまい
 行動の名を失わせてしまうのだ。
 行動の名を失わせてしまうのだ。

[ハムレット、オフィーリアの小袖に気がつき、近づく]

[詞こゝロ] 待てよ、あの、美しいオフィーリアが!
 [オフィーリアの墓前にひざまづき、小袖を指く]

For in that sleep of death what dreams may come
 When we have shuffled off this mortal coil
 70 Must give us pause. There's the respect
 That makes calamity of so long life,
 For who would bear the whips and scorns of time,
 Th'oppressor's wrong, the proud man's contumely,
 The pangs of despised love, the law's delay,
 75 The insolence of office, and the spurns
 That patient merit of th'unworthy takes,
 When he himself might his quietus make
 With a bare bodkin? Who would these fardels bear,
 To grunt and sweat under a weary life,
 80 But that the dread of something after death,
 The undiscovered country from whose bourn
 No traveller returns, puzzles the will,
 And makes us rather bear those ills we have
 Than fly to others that we know not of?
 85 Thus conscience does make cowards of us all,
 And thus the native hue of resolution
 Is sicklied o'er with the pale cast of thought,
 And enterprises of great pith and moment
 With this regard their currents turn awry,
 90 And lose the name of action. Soft you, now,
 The fair Ophelia!—Nymph, in thy orisons
 Be all my sins remembered.

Act 5 Scene 1

ALL [THE LORDS]

Gentlemen!

HORATIO (to Hamlet) Good my lord, be quiet.

HAMLET

Why, I will fight with him upon this theme

45 Until my eyelids will no longer wag.

QUEEN GERTRUDE O my son, what theme?

HAMLET

I loved Ophelia. Forty thousand brothers
 Could not, with all their quantity of love,
 Make up my sum.—What wilt thou do for her?

[ワカ] (ヨワ、拍不合)

ハムレット：私はオフィーリアを愛していた。

愛していた、オフィーリアを!

[ハムレット、重しく後悔し、微笑する]

[ノル] (ヨワ)

たとえ4万人の兄がいようと、

その愛を全部よせ集めようと、

私の愛には及ぶまい。

私はオフィーリアを愛していた。

[ハムレット、寝轉の態。尺八の音。墓前で瞑想に入る]

4

[Hamlet continues meditation. Then Ophelia's ghost appears. She slowly approaches him, and extends her hand toward him as if to bless him, then disappears. Hamlet is enlightened.]

Act 5 Scene 2

[NORU-rhythmic singing] (Strong)

Hamlet To be or not to be is no longer the question.

3.1.58'

If it be now, it be now,

5.2.166-168

'Tis not to come, not to come;

If it be not to come, it will be now;

If it be not ~~to~~ now, not ~~to~~ now,

Yet it will come, it will come;

The readiness is all, the readiness is all;

There is a special providence in the fall of a sparrow.

165-166

Since no man knows aught of what he leaves;

A man's life is no more than to say 'one'.

75

The readiness is all.

168

[Shute goes to kitchen.
Muzumiyo: aural music.]

Enter Prince Hamlet and Horatio

HAMLET

So much for this, sir. Now, let me see, the other.
You do remember all the circumstance?

HORATIO Remember it, my lord!

HAMLET

Sir, in my heart there was a kind of fighting
That would not let me sleep. Methought I lay
Worse than the mutines in the bilboes. Rashly—
And praised be rashness for it: let us know
Our indiscretion sometime serves us well
When our dear plots do pall, and that should teach us
There's a divinity that shapes our ends,
Rough-hew them how we will—

HORATIO

It must be shortly known to him from England
What is the issue of the business there.

HAMLET

It will be short. The interim's mine,
And a man's life's no more than to say 'one'.
But I am very sorry, good Horatio,
That to Laertes I forgot myself;
For by the image of my cause I see
The portraiture of his. I'll court his favours.
But sure, the bravery of his grief did put me
Into a tow'ring passion.

HORATIO Peace, who comes here?

Enter young Orlin, a courtier, [taking off his hat]

ORLIN

Your lordship is right welcome back to Denmark.

HORATIO If your mind dislike anything, obey it. I will
forestall their repair hither, and say you are not fit.

HAMLET Not a whit. We defy augury. There's a special
providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis
not to come. If it be not to come, it will be now. If it
be not now, yet it will come. The readiness is all. Since
no man has aught of what he leaves, what is't to leave
betimes? 170

[やがてオフィーリアの亡霊現れる。ハムレットに近づき、祝福するかのごとく手を差し伸べ、静かに消える。ハムレット、一つの悟りを得る。]

[ノル] (ツヨク)

ハムレット：生か死か、それはもはや唯一の問題ではない。

(死は) いま来れば、

後には来ない。

後に来ないなら、今来る。

たとえ今来なくても、

いつかは必ずやって来る。それなら、

覚悟して生きること、それが肝要だ。

雀が一羽落ちるのも、摂理というもの。

今はいま、来世は来世、精一杯生きよう。

人間の一生は「ひとつ」と数えるほどのもの。

さあ、覚悟して生きること、それが肝要だ。

[シテ後見席へ]

物着

Hamlet's KIRI DANCE
 (After the fencing match or duel with Laertes)
 [NORU-rhythmic singing] (Soft)

Hamlet: Exchange forgiveness. 5. 2. 287
 Heaven make thee free of it. 284-286
 I follow thee: I'm dead.
 O, wretched queen, adieu.
 You that look pale and tremble,
 Had I but time, O, I could tell you. 288-290
 Alas, but let it be.
Omoeba kari no yado. 江戸口
 Life is a lying dream. 致盛 (Waley)
 This world is not for aye: 3. 2. 191
 All that lives must die, 1. 2. 72-73
 Passing through nature to eternity.
 He only wakes who casts the world aside. 致盛 (Waley)
 There is a divinity that shapes our ends, 5. 2. 10-11
 Rough-hew them how we will:
 The readiness is all. 168
 (*Ji-uta*/Chorus) Now cracks a noble heart, 5. 2. 312
 The rest is silence: Good night, sweet prince: 310; 312
 The rest is silence, silence: 310
 Flights of angels sing thee to thy rest, 313
 Flights of angels sing thee to thy rest.

Act 5 Scene 2

HAMLET
 Here, thou incestuous, murd'rous, damned Dane,
 Drink off this potion. Is thy union here?
 Follow my mother. King Claudius dies
 LAERTES He is justly served.
 280 It is a poison tempered by himself.
 Exchange forgiveness with me, noble Hamlet.
 Mine and my father's death come not upon thee,
 Nor thine on me. He dies
 HAMLET
 Heaven make thee free of it! I follow thee.
 I am dead, Horatio. Wretched Queen, adieu! 285
 You that look pale and tremble at this chance,
 That are but mutes or audience to this act,
 Had I but time—as this fell sergeant Death
 is strict in his arrest—O, I could tell you—
 But let it be. Horatio, I am dead, 290
 Thou liv'st. Report me and my cause aright
 To the unsatisfied.

Act 1 Scene 2

QUEEN GERTRUDE
 Good Hamlet, cast thy nightly colour off,
 And let thine eye look like a friend on Denmark.
 Do not for ever with thy veiled lids
 Seek for thy noble father in the dust. 70
 Thou know'st 'tis common—all that lives must die,
 Passing through nature to eternity.

Act 3 Scene 2

PLAYER KING
 I do believe you think what now you speak;
 But what we do determine oft we break.
 Purpose is but the slave to memory,
 Of violent birth but poor validity,
 Which now like fruit unripe sticks on the tree,
 But fall unshaken when they mellow be.
 Most necessary 'tis that we forget
 To pay ourselves what to ourselves is debt.
 85 What to ourselves in passion we propose,
 The passion ending, doth the purpose lose.
 The violence of either grief or joy
 Their own enactures with themselves destroy.
 Where joy most revels, grief doth most lament;
 90 Grief joys, joy grieves, on slender accident.
 This world is not for aye, nor 'tis not strange
 That even our loves should with our fortunes change;

Act 5 Scene 2

HAMLET
 O, I die, Horatio!
 The potent poison quite o'ercrows my spirit. 305
 I cannot live to hear the news from England,
 But I do prophesy th'election lights
 On Fortinbras. He has my dying voice.
 So tell him, with th'occurrences, more and less,
 Which have solicited. The rest is silence. 310
 O, O, O, O! He dies
 HORATIO
 Now cracks a noble heart. Good night, sweet prince,
 And flights of angels sing thee to thy rest.—

ハムレット 救いの舞

(シアーティズとのフェンシング(決闘)のあと)

[ノル](ヨウ)

ハムレット：許し合おう。

この世から解放されるのだ。

私もあとから行く。もう命はない。

あわれな妃よ、さようなら。

背ざめ震えている皆さん、

時があれば、話せるのだが —

ああ、だが、もういい。

「思えば仮の宿」

人の一生は一睡の夢のよう。

この世は永遠のものではない。

生ある者はすべて死に、

永遠の世界へ移ってゆく。

ひとたびこの世を捨てる時、人は目覚める。

最期の仕上げは神意による、

いかに人間が荒削りしようとも。

肝要なのは覚悟。

(地謡：) 気高い心が歌ってしまわれた。

あとは静寂。おやすみなさい、美わしの殿下。

あとは静寂、静寂 —

天使の歌声に誘われ、安息の世界に入られますよう。

天使の歌声に誘われ、安息の世界に入られますよう。